医学研究者に対する文献利用ガイド

吉 本 瑞 応*

はじめに

編集部からこのようなテーマで執筆するようにとの依頼をうけて当惑した。というのは、文献利用方法についてのガイドは医学生になされるべきもので、学生時代にこそ文献および文献探索方法について一通りの基礎知識をもたせ、彼等の将来の研究の足がかりとなるように、ある程度学問研究の態度や方法を学びとらせることが重要であり、これがまた医学教育の本質にも添うゆえんであると信じているからである。

しかしながら、研究・診療の成果をあげるうえには、文献利用が重要な役割を果たすことを考えあわせ、編集部から依頼されるままに、このテーマにあえて取り組むことにしたのである。

ガイドの必要性の分析

近頃、どの分野でも、この種の講習会がとりあげられ、むしろブーム的であると言える。だからと言って、研究者に対する文献利用ガイドの必要性があるかどうか、研究者自身もそれを要求しているかどうか、さらには大学においてもそのような機会を設けることを歓迎しているかどうかなどについて、まず分析検討するのが先決問題であると考えられる。

つぎに、ガイドの必要性があるとすればどの程度のものか、どういう方法で必要かを事前に知り、要求に即して実施しなければならないように思う。案外このようなことがわかっていてもなんとなく見すごされて、往々にして図書館員の熱意から計画をして、研究者側の要求とかけはなれたことが起る懸念があると思われるからであ

る。計画することはそのまま批判につながるものであることを考慮しなければ、折角の善意も努力もかえって悪い結果をもたらすことになるおそれがある。

私は、こうしたことがらを具体的に分析するために、次のような項目について、本学研究者を対象にアンケートによる方法で文献利用の実態把握を試みた。

調査内容

研究者はどのような目的で、どのような種類の文献を求めるか。

研究過程において、それぞれの時期に必要な文献を何を手がかりとして求めるか。また、どのような方法が一番多く利用されているか。

文献探索の鍵とも言えるツールの利用状況はどうか。

ガイドの機会を設けることの希望の有無について。

雑誌に合綴された索引・抄録の利用状況など。

調査結果とその分析

アンケート配付数 300 に対し、回答 144 名で回収率 48 %であった。

この数字は必ずしも高いものとは言えないが、私としては満足していい回収ができたと考えている。その理由はアンケート依頼期間がわずか 5 日間であったこと、時期的に来年度予算要求の折衝が大詰めになっていたこと、試験期にぶつかったこと、その上に調査項目が B 4 用紙 5 枚にわたる龍大なものになって、しかも設問事項も吟味する余裕がなかったために答えにくいものがあったことなどがあげられる。

次に集計結果を示す。

* Zuio YOSHIMOTO, 奈良県立医科大学附属図書館

第 1 図 回答者の職，研究分野一覧

第 2 図

文献の利用目的、および必要とする文献の内容について調査し、基礎・臨床医学研究者の別にその結果をまとめたものである(第2図)。実際には相互に重複関連することが多いが、研究の目的で理論、展望を求め臨床における診療の目的に症例、診断、外科的技法を求めるのは常識的であろう。ただ、数値、データおよび装置の説明、手順、技法については基礎においてその要求度が大きい。研究者の必要とする文献の種類や内容は、研究者の属する研究分野によって異なることはこれによっても明らかである。

研究テーマの選定から研究完成にいたる過程で、研究者は必要とする文献を何を手がかりとして求めるか、それを各研究段階ごとに調査することを試みたものである(第3図)。

全般的にみて、研究者の文献を引き出す特性はほぼ予想していたような結果であった。また、研究分野の相違からの特性も特に注目すべきものがなかった。

テーマの選定の段階では雑誌論文、総説が多く利用され、研究が進むにつれて常に雑誌論文に目を通す比率が高くなっていることは、雑誌論文の重要度を物語るものである。と同時に雑誌の引用文献から手がかりとする方

法も高くなっていることが注目される。

研究者が定期的に目を通す雑誌のタイトル数は、今回の調査では外国雑誌6種(専門分野3, 関連分野2, 総合雑誌1), 和雑誌4種(専門分野2, 関連分野1, 総合雑誌1)計10種が回答者の大部分を占めていた。研究者は平素から折にふれて研究の将来を見越し、これら雑誌論文から、あるいはいろんな手段、方法により多くの文献に接し、これを系統的に整理して「自分の文献ファイル」に収め、全段階を通じて随時多く利用している。ことに研究開始からこの方法がかなり利用されているようである。

テーマの選定、決定に上司、同僚からヒント、指示を受ける研究者がかなり多い。百読は一聞にしかずで一番手っ取り早い方法であろう。しかし研究が進むにつれて自からの文献探索による文献の利用が高まっている。これは大学という性格から当然の結果であると考えられる。と同時に、最近の情報の迅速性が要求され研究者同志の口頭による方法がますます増える傾向にあることも見のがせない。

テーマの決定の段階で、索引誌・抄録誌による網羅的調査法が雑誌論文に続いて高い比率を占めているのは当

第3図

然のことであり、注目すべき結果であろう。

会議議事録の利用が一部の研究者を除いてあまり利用されていないのは意外であった。

実験の段階では、単行本、Handbuch、速報誌が目立って利用されているのも当然と言える。

「図書館員から」というのは、今回の調査では数としては低いものであるが、文献探索係員によるものがテーマの決定の段階での網羅的調査、論文完成時における参考文献のリストアップのチェックなどに多く利用されていることが判明した。

全般的にみて、答えにくい設問であったと思う。それは個々の研究者にも文献探索にはそれぞれパターンをもっていること、その方法もケースバイケースであること。また、研究途上の研究者、一生涯のテーマに取り組む研究者など、研究者の層によっても変わってくるからである。

回答者の中には、すべて独自の考えから、独自の発想により、独自の方法で行なうと補注した研究者も少なからずあった。たしかに研究は研究者個人の「考える」力を源として行なわれ、自分の頭の中からヒントが生れ、着想となり、研究テーマに発展して、研究が完成される

のは事実であろう。しかし、研究者の着想の独創性の度合の検討、研究テーマとして実施可能かどうかの適否の判断の段階でも文献調査は必要であろう。また、研究の追試に終わらないように文献は無視されることは許されないであろう。さらに、自分の研究の独自性、研究成果の価値の判定にも文献調査は必要であることは言うまでもないであろう。

科学技術庁計画局で実施した科学技術研究者等の情報利用の実態調査で、情報の不足によるすでに発表されている事実を知らずに重複研究した経験をもつ研究者は、全体の半数近くいる結果を見ると、文献調査を完璧にすることは研究者にとっていかに不可欠の要件であるかわかる。

第4図は第3図のすべての研究過程における研究者の手がかりとする文献入手方法を集計したもので、利用頻度の多いものから順に示したものである。Saul Hernerがアメリカにおける500人の医学研究者を対象したほぼ同種の調査結果と比較すると、ほとんど同様の結果となったことに驚いた。多少抄録誌、索引誌の利用が不充分かと思われる程度であろう。しかし、その不充分さは雑誌の中に合綴されたその専門分野の抄録、あるいは目次

第4図

本学調査
Saul Hernerの調査

第5図

	資料があることを知っている	活用の仕方を知っている	人から教わった	現物を見て憶えた	主任司書の講義から	図書館員から	無記人	利用したことがある	定期的に	しばしば	ときどき
	0 20 40 60 80 100 %	0 20 40 60 80 100 %	%	%	%	%	%	0 20 40 60 80 100 %	%	%	%
Zentralblatt...	48.7	38.7	33	43	0	2	22	29.4	2	10	17
Excerpta Medica	76.5	58	13	38	36	6	7	55.5	5	23	27
Biological Abstracts	69.7	54.6	15	27	38	5	15	47.1	1	19	27
International Abstracts of Biological Sciences	50.4	32.8	13	41	26	3	17	22.7		4	18
Chemical Abstracts	69	49.6	12	32	42	4	10	36.5	2	8	25
医学中央雑誌	95.8	79.8	26	36	26	7	5	79	9	24	42
Quarterly Cumulative Index Medicus	39.5	28.6	24	32	29	15	0	16		4	12
Current List of Medical Literature	53.8	36.1	19	39	35	2	5	32.8		9	23
Index Medicus	91.6	73.9	24	28	28	14	6	65.5	10	21	32
雑誌記事索引	23.9	15.1	11	44	0	0	45	9.2		7	2
Current Contents	60.5	47.9	11	30	5	2	52	40.3	15	13	12
Reviews								68	9	17	42

速報でおぎなっているようであり、今回の調査では回答者の 38% にあたる研究者がそれらを利用していることから判明した。

レビューはかなり多く利用され、レビューが一挙に重要な文献の収集、選択、評価ができる点で利用が便利であることが認識されてきたようである。私は以前あまり利用されなかったレビューについて、機会のある度に利用の PR に努めている。

雑誌の引用文献によるいもづる調査が 2 位を占めているが、研究者には負担が少なく、よい糸口を選べば成果もあがり易いので手取り早い方法なのであろう。

文献が量的に増加し、その種類も多種多様になってくると、それを利用するうえでの手がかりも重要になってくる。文献探索の鍵ともいえるツールの利用状況について資料別に調査した結果である (第 5 図)。

研究者の一日の研究活動の中で文献探索、文献収集、文献を読む時間にあてられるのは、今回の調査では 2～3 時間というのが、回答者の 36% を占め最も多かった。また、研究者の研究テーマについて過去の関係文献を総ざらいに探す場合、今回の調査では解答者の 46% が 5～10 年の過去の資料に拠りどころを求めている。

したがって研究者は、文献探索の方法をよく検討して、ツールをフルに活用して短時間で能率をあげ、できる限り実験、研究に没頭できるように努めなければならないのが研究者の環境であろう。

資料があることを知っている研究者の約 70% は活用の仕方を知っている。活用の仕方を知っている研究者の約 80% は利用したことがあると言う結果がでている。この結果から、すべての研究者がツールの活用の仕方を心得ているとすれば、ほとんどの研究者がそれを利用するだろうと考えられる。資料があることすら知らない研究者もいるということを指適しておく必要がある。「利用のしおり」にもこれら資料の所蔵巻、収録範囲、索引などについて一覧できるように示して、その紹介に努めている。

医中央誌、Index Med., Excerpta Med., Biol. Abstr., Curr. Contents はかなり高い利用率を示している。なかでも比較的使い方が厄介と思われる医中央誌の利用は群を抜いて目立っている。やはり研究者は国内文献から探索する順序をとることによるものであろう。

Curr. List が利用され、使い易いように思われる Quart. Cum. Index Med. が意外に無視されている原因が考えてもでてこない。

利用頻度から見ると、ことに定期的に目を通す資料として Curr. Contents, Index Med., 医中央誌, Excerpta Med. という順序にも注目される。

Biol. Abstr., Chem. Abstr. は基礎医学研究者の利用が圧倒的であった。

利用の仕方を知っていて利用しない理由としては、時間の余裕がないと答えたものが多く、なんでもかんでも一つのツールをきめてそれを活用しているのが実態のようで、各種各様の資料を類別し、それぞれの特性を吟味して、できるだけ多くのツールを活用する必要があると考えられる。

次にどういう方法で、活用の仕方を覚えたかの分析であるが、この項目はとくに無記入が多かった。たしかに活用の仕方を「知っている」「知らない」と問われても活用能力の問題から答えにくいものであったと考えられる。またその知ったいきさつについても相互に重複することもあり、これだと指示しにくいものがあったと考えられるが、一応集計の結果を考えたい。

一般的に見て研究者が現物にあたって経験的に憶えた方法が一番多いことが指適できる。次に「主任司書の講義から」をあげている者の数が多いことに注目される。講義は年度によって特定の資料を重点的に取りあげることもあったが、一応資料の一般的な解説はすべてにおよぶようにしている。

講義対象が最終学年といえども、医学における「雑誌」の重要性を漠然と理解できる程度で、文献および文献探索と言っても一向にピンとこない学生が多いのではないと思われる。しかし学生時代に一通りの講義を受けているものについては、第 3 図に示した研究過程におけるツールの使い方にも工夫がみられ、比較的自然に文献探索を習慣化していることが追跡できた。彼等がそれだけ専門研究に早く入っていることを考えると、昭和 39 年から試み、わずか 4・5 年にしてこうした効果があらわれていることを認めることができる。受講した当時の学生も今になってそのありがたさを調査票にも記しているものがあったが、思いきって計画した甲斐があったと考えている。受講生は現在までに延 260 人におよんでいるが、こうした本学の試みが軌道にのったのは、前館長がその「必要性」「有用性」を真に認めたことにあったと言える。したがって講義、演習は全員出席の形で実施している。すなわち、かりに 5 名の欠席者があれば、その 5 名に対しても同じ時間の講義を別に設ける方法をとっている。

ガイドに対する研究者の希望

研究者に対し、文献探索方法、索引誌、抄録誌など二次資料の利用の仕方についての講義、演習の機会を設けることに対しての希望の有無の調査では、希望すると答えた研究者は65名(教授4, 助教授9, 講師6, 助手24, 研究生8, 大学院生12, その他2)であった。

希望している65名という数字は回答者の45%を占めている結果で予想外であった。希望しないと答えた研究者で学生対象に実施すると良い3名, すでに受講したから2名, 受講できる時間がないように思う2名, があった。ほのかにも希望しないが初歩研究者にこの種の指導の機会が必要であると回答した研究者が2名あった。

この65名が、ガイドの機会を設けたときに受講する数字かどうかは疑問で再度調査する必要があるが、少なくとも研究者にもガイドの必要性を充分認めていることは疑う余地がなく注目にあたいする。

たしかに、研究者は自分の専門分野の資料の状態について、特にその傾向、内容について、さらに関連領域の資料に関しても深い知識をもっている。しかし、すべてのツールに精通しているとは思われないこと、また現在部分的に限られた調査法を採用していることが、この結果を生んだものと考えられる。

さらにこの希望する65名について、二次資料の利用状況、利用しない理由、探索効果、資料の評価、研究過程における調査法から総合的に判断すると、全く活用の仕方が知らないからと思われるのが5名、一部のツールは知っているが、さらに他の資料についても知りたいと思われるのが26名、以前受講したが、再度希望したい7名、一応知っていて活用もしているが希望すると答えたもの15名、希望すると答えて全くその判断のし難いもの12名と思われる。

次に、講義内容、講義時間、時期、旺日、時間などについての希望をまとめてみるとおおむね次のようである。講義内容については、特に意見はなかったが、研究生に役立つように資料をできるだけ早く見つけられるように、ツールの長所、短所が知りたいなどの注文があった。

時間数については、10時間程度の希望が多かったようであるが、3時間～5時間と希望するのが12名、20時間としたものが2名あった。

時間については、夏期休暇中12名、毎年2月～4月に定期的に7名、適当に6名、早い方が良いとさしませ

まっている研究生が5名あった。

旺日、時間については、土旺日午後が大部分を占め、午前8時～9時という研究者もかなり多かった。

講義内容、講義・演習方法

すでに調査結果を分析しながら折にふれて指適したことで、さきに発表した「医学生に対する文献探索指導」にふれたことがらは省略する。

学生対象の場合には将来いづれの研究分野に進むにしても心得えていなければならない文献探索の重要性を認識させ、片寄らない知識を具えていることが重要条件であり、必要に直面した場合、自から探索し得る基礎的知識を施せばよいわけである。

しかし研究者対象の場合は、各専門分野の必要とする文献内容を理解してその対応手段を講じて、研究分野、研究者別に研究者の立場に立って実際に役立つ工夫をしなければならない。

研究者の中には所属教室所蔵の極めて限られた資料を、しかも自己流で利用している研究者もいないとも断定できないので、当然能率的な文献探索方法、要領、手順、それぞれのツールの利用上の特色、他のツールとの関連などにも重点をおいてガイドする必要がある。

研究者に基礎的な知識がつけばあとは経験的に習得できるが、文献探索には相当の時間と手数を要するので、単にテクニックだけでなく、根気と線密さを要求されるので、その心講えや態度についてもふれておく必要がある。

また、研究者は研究者自身文献の生産者である。したがってその発表する論文は、正しく他の研究者に伝えられる必要がある。

そのためにも論文著述が正しくなければならないので、「論文の書き方」についても講義内容に入れるか、あるいは少なくとも参考文献の紹介は落してはならないと思う。今回の調査ではすでに「論文の書き方」の参考書を読んだことがあると答えた研究者は33%にすぎなかった。

さらに、収集された文献はできるだけ早く、しかも正確に整理保存し、いつでも必要なものを探索できるように「文献整理方法」についても多少ふれておくか、少なくとも参考文献の紹介は必要と思われる。

実施計画の立て方

受ける方も、する方もガイドすれば何とか効果があが

るだろうというあいまいな意図は望ましくなく、実施するには、まず計画を立てることが必要なことは常識だと思う。実際には簡単なスケジュール程度で実施することになり易いが、冒頭にも述べたように、必要があるかどうか、どの程度必要とするかというガイド方針をたてることが重要である。もちろん、研究者の率直な意見が反映されていなければならないことは言うまでもない。

次に、対象者、ガイド方法、実施時期、場所などについてもよく検討をしてスケジュールを作成することである。

計画が支持されるには計画が理解されねばならない。そのためにもこのスケジュールを作成して研究者の理解、支持、信頼を得ることが必要である。そしていわば大学の計画としての立場で具体化することが最も望ましいものである。このような公式としての手順をふんでおかないと往々にして時間、労力の割に効果があがらないとか、忙しい研究者の時間をつぶす結果になったとかいう意見や批判が多くでてくるものである。したがって研究者が認める必要性に充分適合しているスケジュールを作ることが第一である。

む す び

以上、医学研究者に対する文献利用ガイドについて、本学研究者を対象に文献の利用状況の実態調査に基いて、その必要性の分析を試みたのであるが、今回の調査は回収率が必ずしも高くなかった。したがってこの調査がこのまま本学の実態とは断定できないところから決定的な結論はだしにくい。

しかし、文献利用を切実な問題として認識し、さらに学生対象に実施しているその指導の効果から、研究者自身から文献利用ガイドの必要性を認め、そのガイドに何かを期待していると思われる結果を見て、その意義とその責任の重大さを感じている。と同時に学生に対して実施すれば充分だという信念はぐらつき、研究者に対してもガイドの機会、少なくとも希望者に対しては応じなければならないという結論に至った。

また、ガイドの機会を設けることによって、少なくとも従来各教室、医局単位で新しい研究者に対するこの種の指導にかかる時間と労力を省くためにもその必要性は充分に認められて然るべきだと思う。

このような本学の利用の実態、およびガイドに期待をかけられていることが、そのまま各大学に通用するかどうかは甚だ疑問であるが、それぞれの大学でもよくその

実態を把握し、実情に即してこのテーマを考えられるのも無駄ではないと思われる。

また、とくにガイドの機会を設ける必要がなくとも、医学研究者に文献利用の指針となるガイドブックは必要である。目下、日本医学図書館協会が出版計画中の「医学文献利用のハンドブック」の刊行に期待をかけているのはこのためである。

また一方、すべての文献を自分独力で探索することが将来必ずしも適当であるとは考えられない。というのは文献がますます量的に増加し、その種類も内容も多種多様になってきていること、研究そのものも協同研究が多くなっていく傾向もある以上個々の研究者の努力だけでは十分な文献探索をすることがむづかしくなってくると思う。

その意味で、文献探索専門の担当者が教室に、あるいは図書館に数多く生れてきて当然ではないかと思うし、また専門担当者の養成が必要ではないかと思う。

<参 考 文 献>

Crossley, C. A.: Tuition in the use of the library and of subject literature in the University of Bradford. *Journal of documentation*, 24 (2): 91~96, 1968.

Herner, Saul: The information-gathering habits of American medical scientists, *Proceedings of International Conference of Scientific Information*, 267~275, 1958.

Survey of information needs of physicists and chemists. *Journal of documentation*, 21 (2): 83~112, 1965.

Wyatt, H. V. & Bottle, R. T.: Training in the use of biological literature. *Aslib proceedings*, 19 (4): 107~110, 1967.

本田品子: 研究者の文献情報獲得—索引誌・抄録誌利用の実態例—*医学図書館* 14(1): 81~84, 1967.

科学技術研究者等の情報利用の実態に関する基礎調査 *情報管理* 11(6): 300~307, 1968.

高橋達郎 (他): 科学文献 まとめ方, さがし方, 利用の仕方 南江堂 昭和 41.

吉本瑞応: 医学生に対する文献探索指導 *医学図書館* 13(4): 275~277, 1966.